



Data

監督：イライ・ロス
原作：ブライアン・ガーフィールド
出演：ブルース・ウィリス／ヴィンセント・ドノフリオ／エリザベス・シュー／ディーン・ノリス／キンバリー・エリス／カミラ・モローネ／ポー・ナツプ

■■■ショートコメント■■■

◆私が弁護士登録した1974年に公開されたのが、チャールズ・ブロンソン主演の『狼よさらば』（74年）。当時は本業が忙しく、とても映画館に行く暇はなかったため観ていないが、その評判はよく知っている。そんな映画がなぜか今、ブルース・ウィリス主演でリメイクされたが、事前の評判はイマイチ。観客もまばらだったが・・・。

◆妻や娘が殺害された父親の復讐劇の映画は、『プリズナーズ』（13年）（『シネマ33』139頁）や『ソウォン／願い』（13年）（『シネマ33』145頁）の他、リーアム・ニーソンが華麗なアクションをみせた『96時間』（08年）（『シネマ23』未掲載）や『96時間／リベンジ』（12年）（『シネマ30』未掲載）等がある。また、中年男の自分自身の復讐劇としては、『オールドボーイ』の“韓国版”（03年）（『シネマ6』52頁）や“アメリカ版”（13年）（『シネマ33』151頁）や『ジョン・ウィック』（14年）（『シネマ37』77頁）等がある。

しかして、『狼よさらば』も、ある日、設計士のポール・カーギーが不在の間に自宅に押し入った3人組の強盗によって妻が殺害され、帰省中の一人娘が凌辱されたにもかかわらず、警察はなかなか犯人逮捕ができなかったため、“1人自衛団”となった主人公が犯人に容赦のない復讐をする物語だった。そんな1974年の名作が今、主人役をブルース・ウィリス、主人公の職業を設計士から外科医に変えてリメイク。そう聞くと、それだけで本作は既に観たような気分になってしまったが・・・。

◆アメリカは良くも悪くも銃社会の国。本作を観ていると、犯罪が多発する都市・シカゴでは、自衛のため最低一家に一丁は拳銃を備えておく必要があることが理解できる。もっとも、銃の種類や性能は多種多様で、扱い方もそれなりに難しいから、練習も不可欠だ。しかし、一流の外科医になる頭脳があれば、銃の扱いぐらいは簡単なものらしい。

しかして、アメコミ・ヒーローのスーパーマンやバットマンよろしく、ある日ポールは拳銃を持って街にくり出して行ったが、その姿カタチは・・・？

◆ポールの“1人自警団”デビューは拳銃の反動で利き腕である左手に傷を負ったものの、見事に犯人を射殺する上々のもの。そのシーンはSNSで流され、ポールは“フードをかぶった白人男”として一躍シカゴ中のヒーローに。それに味をしめたポールは、忙しい外科手術の合間にチョコチョコと街にくり出して、“1人自警団”の任務を務めると共に、妻子を襲った3人組を探し当てる努力を続けたが、その甲斐あってやっと・・・。

◆もっとも、イスラム国家ならともかく、現代の民主主義国家、法治国家の下では、自力救済＝復讐は禁止されているから、スクリーン上でポールが展開する“1人自警団”活動による悪いヤツらの“射殺”は、当然殺人罪に該当するものだ。そのため、シカゴ警察は悪人逮捕の捜査とは別に、スーパーマン、バットマンまがいの(?)“フードをかぶった白人男”を逮捕する必要に迫られることに。

さあ、そんな中、ポールが3人組の犯人にたどり着き、鉄槌を下すのが先？それとも、警察が“フードをかぶった白人男”を逮捕するのが先？もちろん、典型的な“勸善懲悪モノ”である本作の展開は“見えている”ので、安心して本作後半を楽しもう。

2018(平成30)年10月25日記